暴風

〔圓珠庵雜記〕あらしと、おろしと同じ、萬葉集に下風と書きて、あらしとも、おろしともよめり、頭書眞淵云、嵐は和名に山下出風と書ける意にて、萬葉山下風と書きたれるを、又漸に略して、山下とも、下風とも書きしなり、然れば皆あらしとよむべきを、やまおろしなどよめるはいかにぞや、三吉のゝ山下風のさむけくにと有るも、山のあらしとよむべきなり、今山下風とよめるはわろし、

〔東雅一天文〕風カゼ○中略　暴風をアラシといふは、暴(アラシ)の義也、我國の俗、嵐の字を讀てアラシといふ、此字もと山氣の蒸潤をいひて、迅猛の風をいふ事、もとこれ梵語に出づ、

〔倭訓栞前編阿〕あらし　嵐をよむは、しはちと韻通ず、暴風(アラチ)の義、山城のあらし山、越前のあらち山、もとは同語なるべしといへり、万葉集に下風をあらしとよめるは、おろしと義同じ、孫愐云、嵐山下出風也、よて山下ともかけり、また荒風冬風なども書たり、飄をもよめり、玉篇に大風也と注せる意也、うつぼ物語にあらしの風とも見えたり、

〔萬葉集一雜歌〕大行天皇幸二于吉野宮一時歌

見吉野乃山下風之寒久爾爲當也今夜毛我獨宿牟、

右一首、或云天皇御製歌、

〔空穗物語嵯峨院〕ゆふ暮にうちむれておはしたれば、山ごもりよろこびかしこまりきこえ給ことかぎりなし、○中略　大將も、

もゝしきのむかしのともをみにくればあらしの風もにしきをぞ云く

文屋やすひで

〔古今和歌集五秋〕是貞のみこの家の歌合のうた

吹からに秋の草木のゝほるればうべ山かぜをあらしといふらん

〔倭名類聚抄一風雪〕暴風　史記云、暴風雷雨、漢語鈔云、八夜知、又乃和木乃加世、